J. Rakuno Gakuen Univ., **43** (2)：53～57 (2019)

帝国主義と福音

ポストコロニアル批評による新約聖書の「福音」の読解（5）

小　林　昭　博*

Imperialism and Gospel

Reading the Term “Gospel” in the New Testament through Postcolonial Criticism (5)

Akihiro KOBAYASHI*

(Accepted 5 December 2018)

（承前）

6.3.3. ユダヤ的用法 ── ルカ文書，ヘブライ書

6.3.3.1. ルカ文書における「福音」の用法

ルカ福音書はユダヤ的用法のみでその「福音」を語る。つまり，ルカ福音書の 10 回の用例（1：19，2：10，3：18，4：18，43，7：22，8：1，9：6，16：16，20：1）の全てが動詞形 εὐαγγελίζομαι として現れるということである。その用例は，「洗礼者ヨハネの誕生告知」（1：19），「イエスの誕生告知」（2：10），「洗礼者ヨハネの福音告知」（3：18），「イエスの福音告知」（4：18，43，7：22，8：1，16：16，20：1）[1]，「十二弟子の福音告知」（9：6）に分類される。

ルカ 1：19 は洗礼者ヨハネの誕生という「福音を告げ知らせるために」（εὐαγγελίσασθαι）天使ガブリエルが遣わされたことを描写し，2：10 は天使が救い主イエスの誕生という大いなる喜びを「わたしは福音として告げ知らせる」（εὐαγγελίζομαι）と宣べている場面である。両テクストは天使の「福音告知」として描かれており，先述した黙示 14：6 と並ぶ天使が「福音」と関わる稀有な用例ではあるのだが[2]，両テクストの内容は男子の誕生を「良い知らせ」として告知する旧約聖書（ユダヤ教聖書）を含む古代の中近東[3] およびギリシャ・ローマ世界[4] と共通するものであり，その点では「良い知らせ」（＝福音）の典型を示す用例と言えよう。

ルカ 3：18 は洗礼者ヨハネがキリスト（メシア）の到来を予告する描写に続けて，先駆者ヨハネの宣教活動の要約として，「彼は福音を告げ知らせた」（εὐηγγελίσατο）ことが述べられている。ルカ 1：19 の誕生告知も含め，洗礼者ヨハネが「福音」と直接的に関わる用例はルカにのみ現れるルカ特有のものである[5]。

ルカ 4：18（18-19）と 7：22 はイエスの「福音告知」がイザヤ 61：1-2 の預言の成就であることを示そうとする意図を持つ用例である。前者はイエスがその宣教活動を開始するに当たって，預言者イザヤ（第三イザヤ）が「貧しい者たちに良い知らせを告げ知らせるために，彼〔＝主〕はわたしを遣わした」（εὐαγγελίσασθαι πτωχοῖς ἀπέσταλκέν με）とその召命体験を述べる言葉を引き，今まさにイエスによって（旧約）聖書の預言が実現していることを示している[6]。後者はマタイ 11：5 と並行する Q 資料

1) ただし，ルカ 4：18（18-19）と 7：22 は，前者がイザヤ 61：1-2 の「良い知らせ」の引用であり，そして後者は同テクストの何らかの反映と思われ，厳密には「イザヤ 61：1-2 の成就としてのイエスの福音告知」として描かれている。

2) 拙論「帝国主義と福音 ── ポストコロニアル批評による新約聖書の『福音』の読解（4）」『酪農学園大学紀要　人文社会科学編』43 巻 1 号，酪農学園大学，2018 年，［35-42 頁］41 頁および同頁注 56 参照。

3) 拙論「帝国主義と福音（1）」65-77 頁参照。

4) 拙論「帝国主義と福音（3）」53-59 頁参照。

5) テクストの詳しい分析については，Joachim Jeremias, *Die Sprache des Lukasevangeliums. Redaktion und Tradition im Nicht-Markusstoff des dritten Evangeliums*, KEK Sonderband, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1980, 110f. 参照。

6) なお，ルカ 4：18-19 のイザヤ書の引用はギリシャ語 70 人訳聖書からの混合引用であり，イザヤ 61：1a，b，d，58：6d，61：2a を変則的に引用している（嶺重淑『ルカ神学の探求』教文館，2012 年，150 頁，同『ルカ福音書 1 章～ 9 章 50 節』（NTJ 新約聖書注解）日本キリスト教団出版局，2018 年，174-176 頁参照）。

* 酪農学園大学農食環境学群循環農学類キリスト教応用倫理学研究室
Christian Studies and Applied Ethics, Department of Sustainable Agriculture, College of Agriculture, Food and Environment Sciences, Rakuno Gakuen University, Ebetsu, Hokkaido, 069-8501, Japan

の伝承であり，「貧しい者たちは良い知らせを告げ知らせられている」（πτωχοὶ εὐαγγελίζονται）という表現がイザヤ 61：1 の「貧しい者たちに良い知らせを告げ知らせるために」（εὐαγγελίσασθαι πτωχοῖς）という言葉を反映したものだと目されている[7]。

ルカ 4：43 はその資料でもある並行記事のマルコ 1：38 の「そこでもまたわたしは宣べ伝えるために」（ἵνα καὶ ἐκεῖ κηρύξω）を「わたしは神の王国を福音として告げ知らせなくてはならい」（εὐαγγελίσασθαι με δεῖ τὴν βασιλείαν τοῦ θεοῦ）に変更しているが，この改変はルカの編集に帰されるものである。また，ルカ 8：1 の「彼は神の王国を宣べ伝え，福音として告げ知らせた」（κηρύσσων καὶ εὐαγγελιζόμενος τὴν βασιλείαν τοῦ θεοῦ）という表現も，ルカの手による創作・編集である[8]。そして，ルカ 16：16 はマタイ 11：12–13 と並行し，Q 資料に属すると思われるが，ルカにはマタイにはない「神の王国が福音として告げ知らせられる」（ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ εὐαγγελίζεται）という一文が加えられており，これもまたルカの編集に帰されるものである。これらの 3 テクストは「神の王国」が「福音」として宣べ伝えられているテクストであり，ルカの「福音」が「神の王国」の宣教と密接に繋がっていることが理解できる。

ルカ 20：1 の「彼〔＝イエス〕は教え…福音として告げ知らせた」（διδάσκοντος αὐτοῦ…… καὶ εὐαγγελιζομένου）も物語の導入としてルカが創作したものと考えられる。だが，この創作は直前の「神殿での暴力」（ルカ 19：45–48）の並行記事（マルコ 11：15–19）であるマルコ 11：17 の「彼は教えて言った」（ἐδίδασκεν καὶ ἔλεγεν）を用いて改変したものであろう。

ルカ 9：6 は弟子が「福音」と関係するテクストであり，並行記事のマルコ 6：12 のイエスの十二人の弟子派遣を資料として，ルカはマルコの「彼ら〔＝十二人〕は人々が悔い改めるために宣べ伝えた」（ἐκήρυξαν ἵνα μετανοῶσιν）を「彼ら〔＝十二人〕はあらゆる場所で福音を宣べ伝え，癒しを行った」（εὐαγγελιζόμονοι καὶ θεραπεύοντες πανταχοῦ）に変更している。4 福音書においてイエスの弟子が「福音」と関わるのはルカ 9：6 のみである。

如上のルカ福音書の動詞形 εὐαγγελίζομαι の用例から看取されることは，ルカが「福音」をイエスだけではなく，（旧約）聖書から連綿と続く救済史的連続性を有するものとして理解しているということである。つまり，ルカは「《（旧約）聖書》→《洗礼者ヨハネ》→《イエス》→《十二弟子》」へと連なるものとして「福音」を理解しているということである。そして，その連続性を示すために，（旧約）聖書の「良い知らせ」の用法，すなわちユダヤ的用法である動詞形 εὐαγγελίζομαι によって「福音」を提示していると考えられるのである。それゆえ，ルカはイエスの宣教活動の冒頭を飾る「イエスのナザレ説教」（4：16–30）をイザヤ 61：1–2 の「良い知らせ」の引用から始め，イエスが告げ知らせる「福音」がイザヤ書の告げ知らせた「良い知らせ」と連続しているということを明示し，ルカが提示する「福音」をルカ神学の特徴である救済史の中心に位置づけ，（旧約）聖書とルカ福音書との救済史的連続性の証左にしていると考えられるのである。

そして，その救済史的連続性をよりいっそう推し進めるのが，ルカ文書の第二部に当たる使徒言行録（使徒行伝）である。使徒言行録（使徒行伝）には動詞形 εὐαγγελίζομαι の用例が 15 回ある（5：42，8：4，12，25，35，40，10：36，11：20，13：32，14：7，15，21，15：35，16：10，17：18）。また，ルカ福音書には用いられてはいない名詞形 εὐαγγέλιον が 2 度使用されている（15：7，20：24）。

動詞形 εὐαγγελίζομαι の 15 回の用例は，「使徒たちの福音告知」（5：42），「散らされた者たちの福音告知」（8：4，11：20），「フィリポの福音告知」（8：12，35，40），「ペトロとヨハネの福音告知」（8：25），「ペトロの福音告知」（10：36），「パウロの福音告知」（13：32，17：18），「パウロとバルナバの福音告知」（14：7，15，21，15：35），「パウロ一行の福音告知」（16：10）の用例に分けられる。これらの 15 回の用例は，先に示した「《（旧約）聖書》→《洗礼者ヨハネ》→《イエス》→《十二弟子》」という「福音」の救済史的連続性が使徒を中心とする「初期キリスト教の宣教者」にも受け継がれていることを示そうとしており，ここにルカの明白な意図を読み取ることが可能である[9]。

---

7) 拙論「帝国主義と福音（4）」41–42 頁および同頁注 64 参照。

8) Jeremias, *Die Sprache des Lukasevangeliums,* 174–176; François Bovon, *Das Evangelium nach Lukas I (Lk 1,1–9, 50)*, EKK III/1, Zürich: Benziger Verlag und Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1989, 397 参照。

9) それゆえ，ルカは使徒 21：8 において「福音告知者／福音宣教者」を表す εὐαγγελίστης という稀な用語を ── 擬似パウロ書簡のエフェソ 4：11 とⅡテモテ 4：5 とともに ── 使用することができたと考えられる。なお，

名詞形 εὐαγγέλιον の 2 回の用例は，「ペトロ」（15：7）と「パウロ」（20：24）の演説（説教）において一度ずつ用いられている。前者には「福音の言葉を」（τὸν λόγον τοῦ εὐαγγελίου）という表現が使われており，後者には「神の恵みの福音を」（τὸ εὐαγγέλιον τῆς χάριτος τοῦ θεοῦ）という言い回しが用いられている。これら 2 回がルカ福音書には現れない名詞形 εὐαγγέλιον が使徒言行録（使徒行伝）に現れる用例だが，これら 2 例が使徒言行録（使徒行伝）の「福音」の用法を左右するものとは考えられないところから，用法的にはあくまでも例外の範疇に留まるものと見なされる。

このようにルカ文書における「福音」の用法は，全 27 回の用例の 92.5％を占める動詞形の用法，すなわちユダヤ的用法と見なすことが妥当である。したがって，ルカ文書全体の「福音」の用法は，「《（旧約）聖書》→《洗礼者ヨハネ》→《イエス》→《十二弟子》→《初期キリスト教の宣教者》」へと連綿と続く救済史的連続性を示すために，ルカが用いている（旧約）聖書であるギリシャ語 70 人訳の「福音」の用法である動詞形 εὐαγγελίζομαι を使用したものと結論づけられるのである[10]。

6.3.3.2. ヘブライ書における「福音」の用法

ルカ文書同様，ヘブライ書もユダヤ的用法で「福音」を語る。ヘブライ書の用例は 4：2，6 の 2 回であり，前者は「なぜなら，あの者たちと同様にわたしたちもまた福音を告げ知らせられているからである」（καὶ γάρ ὡσμεν εὐηγγελισμένοι καθάπερ κἀκεῖνοι）という文面であり，後者は「先に福音を告げ知らせられた者たちは不従順のゆえに入らなかった」（καὶ οἱ πρότερον εὐαγγελισθέντες οὐκ εἰσῆλθον δι᾽ ἀπείθειαν）というテクストである。

両テクストの「福音」は直前のヘブライ 4：1 のイスラエルの民に対する「約束」（ἐπαγγελία）[11] と同義に理解することが可能である[12]。すなわち，ヘブライ書の著者は荒野のイスラエルの民に告げ知らせられた「約束」と自分たちに告げ知らせられている「福音」とが同じものだと理解しようとしているということである。川村輝典によれば，それは「荒野のイスラエルの民たちにも福音が聞かされていたことを意味する」[13] ものであり，「荒野の世代が聞いた神の言は，キリスト者が聞かされている神の言と別なものではないことを著者は強調」[14] しているいうことである。つまり，ヘブライ書の著者は「イスラエルの民」と「キリスト者」との間に救済論的連続性を見ているということであり[15]，このような発想は「《旧約聖書》と《新約聖書》」の連続性を標榜するキリスト教神学に受け継がれているものでもある。

そして，ヘブライ書が動詞形の用法のみで「福音」を語るのは，ヘブライ書の（旧約）聖書引用が全てギリシャ語 70 人訳聖書からのものであることからも推察できるように[16]，ルカ文書同様に，ヘブライ書の著者が 70 人訳聖書の「福音」の用法を踏襲したからだと考えられる。そして，ヘブライ書が「フィロン主義」（philonisme）に彩られた文書であるという説を首肯すれば[17]，ヘブライ書の著者が動詞形のみで「良い知らせ」（福音）の語を用いるフィロンの用法に倣ったということも大きな要因だった推察することが可能である。そのように考えると，フィロンを論じたさいにも指摘したように[18]，「《ヘブライ語聖書》→《ギリシャ語 70 人訳聖書》→《フィロン》」

εὐαγγελίστης については，拙論「帝国主義と福音（4）」38 頁参照。

10) Strecker, *EWNT* II, 185＝『釈義事典』Ⅱ，109–110 頁は，εὐαγγέλιον が使徒の宣教を意味する術語に転じてしまったゆえに，ルカはその福音書において εὐαγγέλιον の語をイエスの宣教に充てて使用することを不適切だと理解していたと推論する。だが，それだけの理由であれば，ルカは使徒言行録（使徒行伝）において名詞 εὐαγγέλιον をもっと多く使用できたはずであり，シュトレッカーの推定も考慮に入れる必要はあるが，それだけでは決定打に欠ける。やはり，ルカにとって，「福音」は（旧約）聖書（ギリシャ語 70 人訳）が用いる動詞形 εὐαγγελίζομαι を基本にしていたと考える方が蓋然性が高いと思われる。

11) ヘブライ書の ἐπαγγελία の用例は，4：1，6：12，15，17，7：6，8：6，9：15，10：36，11：9，12，17，33，39 の 10 回である。

12) Friedrich *ThWNT* II, 718; Julius Schniewind/Gerhard Friedrich Art. ἐπαγγέλλω, κτλ., *ThWNT* II (1935), [573–583] 581, bes. Anm. 67; Paul Ellingworth, *The Epistle to the Hebrews. A Commentary on the Greek Text*, NIGTC, Grand Rapids: Eerdamans, 1992, 240f. 参照。なお，川村輝典『ヘブライ人への手紙』（一麦聖書註解）一麦出版社，2004 年，114 頁をも参照。

13) 川村輝典『ヘブル書の研究』日本基督教団出版局，1993 年，66 頁。

14) 川村『ヘブル書の研究』68 頁。

15) ルカの「救済史神学」における「救済史的連続性」と区別するために，「救済論的連続性」という表現を用いた。

16) ヘブライ書の旧約聖書引用については，川村輝典『ヘブライ人への手紙研究 ── その神学的分析』一麦出版社，2014 年，12–14 頁参照。

17) ヘブライ書のフィロン主義については，Ceslas Spicq, *L'Epître aux Hébreux I*, ÉB, Paris: Gabalda, 1952, 39–91; 川村『ヘブル書の研究』163–195 頁を参照。

18) 拙論「帝国主義と福音（3）」55–56，57–58 頁参照。

という流れを継承し，「《ヘブライ語聖書》→《ギリシャ語 70 人訳聖書》→《フィロン》→《ヘブライ書》」という流れを仮定することが可能であろう。つまり，ヘブライ書の著者はフィロンが 70 人訳聖書の用法を踏襲しているように，自らも 70 人訳聖書からフィロンが受け継いだ用法を踏襲し，「福音」の語を動詞形で用いていると考えられるということである。

6.3.4. キリスト教的用法 ── マルコ福音書

6.3.4.1. マルコの「福音」

マルコ福音書は歴史上初めてギリシャ語の中性名詞単数形の εὐαγγέλιον をイエスの事績を表す術語として用いた文書である[19]。むろん，マルコ以前にパウロが εὐαγγέλιον の語を用いており，マルコの「福音」はパウロないしパウロに影響を与えたシリアのアンティオキアのキリスト教に遡源すると推定される。だが，すでに確認したように[20]，パウロは名詞形と動詞形のいずれも区別なく用いており，パウロの「福音」はユダヤ世界とギリシャ・ローマ世界の双方の影響を被っているものと思われる。それに対して，マルコの場合は名詞形 εὐαγγέλιον のみでその「福音」を語っている[21]。しかも，マルコの「福音」の用法が極めて特殊なものであるということは，マルコを資料とする他の共観福音書のマタイとルカにおいて，名詞形 εὐαγγέλιον の語が積極的に用いられていないことからも明らかであり[22]，さらにパウロの「福音」を継承したはずの擬似パウロ書簡において，名詞形 εὐαγγέλιον の使用頻度が著しく下がっていることからも疑いえない[23]。

6.3.4.2. マルコ福音書における「福音」の用法

マルコ福音書は名詞形 εὐαγγέλιον のみを用い，その用例は 7 回を数える（1：1，14，15，8：35，10：29，13：10，14：9）。マルコの用法上の特徴は，パウロと同じく，「福音」の絶対用法であり，1：15，8：35，10：29，13：10，14：9 の 5 例が絶対用法として現れる。それ以外の 2 例は，1：1 では「イエス・キリストの」（Ἰησοῦ Χριστοῦ）が付加され，1：14 には「神の」（τοῦ θεοῦ）が付け加えられている。

マルコ 1：1 の「イエス・キリストの福音の始め」（Ἀρχὴ τοῦ εὐαγγελίου Ἰησοῦ Χριστοῦ）は[24]，マルコの編集の手になるこの福音書の表題とでも言うべきものである[25]。属格の「イエス・キリストの」（Ἰησοῦ Χριστοῦ）は主格的属格とも対格的属格とも理解できるため，いずれの意味にも取れるが[26]，表題という性格を鑑みると，「イエス・キリストについての福音」といった意味であろう。1：14 の「神の福音を宣べ伝える」（κηρύσσων τὸ εὐαγγέλιον τοῦ θεοῦ）は，イエスの宣教活動の開始を宣言する内容である。属格の「神の」（τοῦ θεοῦ）は主格的属格であり，「神がもたらす福音／神が与える福音」の意であろう。したがって，このテクストにおいて，イエスは「福音の主体」ではなく，「神の福音の宣教者」（神がもたらす福音の宣教者／神が与える福音の宣教者）として位置づけられているということである。

絶対用法の用例は，マルコ 1：15「福音において信じよ」（πιστεύετε ἐν τῷ εὐαγγελίῳ），8：35「わたし

---

19) 田川『新約聖書　訳と註 1』131–133 頁参照。

20) 拙論「帝国主義と福音（4）」38–39 頁参照。

21) 「福音」の起源に遡る作業は本論文の主題である「ポストコロニアル批評による新約聖書の《福音》の読解」を試みるさいに行うが，Georg Strecker, *Eschaton und Historie. Aufsätze*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1979, 183–228 は，εὐαγγέλιον の背景をギリシャ・ローマ世界の皇帝礼拝に求めつつも，単数形の εὐαγγέλιον とギリシャ・ローマ世界で通常用いられる複数形の εὐαγγέλια とを峻別し，単数形の εὐαγγέλιον がキリスト教の革新的な創作であると見なしている（idem, *EWNT* II, 179f. =『釈義事典』II，107 頁をも参照）。このようなシュトレッカーの見解に対して，Evans, *VTSup* LXX/2, 670f. n. 39 は，シュトレッカーがタルグムの用例を無視し，旧約聖書的背景を過小評価していると批判し，新約聖書の中性名詞単数形 εὐαγγέλιον の背景に，ギリシャ・ローマ世界だけではなく，ユダヤ教・ユダヤ世界の影響をも見ようとする。だが，シュトレッカーが言うように，中性名詞単数形の εὐαγγέλιον には，キリスト教による革新的な意義づけがあったと推定できるのである（詳しくは後述する）。したがって，εὐαγγέλιον の背景はギリシャ・ローマ世界にあると見なすことが至当である（田川建三『原始キリスト教史の一断面 ── 福音書文学の成立』勁草書房, 1968 年, 312–313, 317 頁注 2，大貫隆『マルコによる福音書 I』（リーフ・バイブル・コメンタリーシリーズ）日本基督教団宣教委員会「“現代の宣教”のための聖書注解書」刊行委員会／日本基督教団出版局，1993 年，40 頁参照）。

22) 拙論「帝国主義と福音（4）」41–42 頁および上述のルカ文書に関する議論を参照。

23) 拙論「帝国主義と福音（4）」39–40 頁参照。

24) マルコ 1：1 の「神の（息）子の」（υἱοῦ θεοῦ）は，本文批評上，後代の加筆である（田川建三『マルコ福音書上巻』（現代新約注解全書）新教出版社，1972 年，増補改訂版，1997 年，7–8 頁，同『書物としての新約聖書』勁草書房，1997 年，472–481 頁，同『新約聖書　訳と註 1』133–135 頁）。なお，大貫『マルコによる福音書 I』38–39 頁は「神の（息）子イエス・キリスト」を本来の読みとして採用している。

25) 大貫『マルコによる福音書 I』52 頁，田川『新約聖書訳と註 1』130 頁参照。

26) 大石健一「マルコにおける『福音』（εὐαγγέλιον）の起源とその用法」『新約学研究』44 号，日本新約学会，2016 年，［7–22 頁］8–9 頁参照。

と福音のために」（ἕνεκεν ἐμοῦ καὶ εὐαγγελίου），10：29「わたしのために，そして福音のために」（ἕνεκεν ἐμοῦ καὶ ἕνεκεν τοῦ εὐαγγελίου），13：10「まず福音が宣べ伝えられなくてはならない」（πρῶτον δεῖ κηρυχθῆναι τὸ εὐαγγέλιον），14：9「福音が宣べ伝えられるところでは」（ὅπου ἐὰν κηρυχθῇ τὸ εὐαγγέλιον）の5例である。マルコが使う「福音」の絶対用法はパウロに由来するものだと考えられ[27]，それゆえマルコの「福音」を考察するうえで重要なことは，パウロとの関係性である。

佐藤研は「マルコ劈頭の言葉 ──「《イエス・キリストの福音》の源」── 自体が，パウロ的『キリストの福音』（ロマ 15：19，一コリント 9：12，二コリント 2：12 など参照）の『源』を新しく呈示するという宣言に読める」[28] と述べ，パウロとマルコとの間の連続性を認めている。だが，問題はパウロの「福音」がギリシャ・ローマ的用法（動詞形と名詞形の併用）であるのに対して，マルコはキリスト教的用法（名詞的用法）のみででその「福音」を語っているということである[29]。

また，マルコが自覚的に εὐαγγέλιον の語を用いていることは，εὐαγγέλιον の用例の全てがマルコの編集において用いられていることからも明らかである[30]。「表題」（1：1）と「宣教の開始」（1：14，15）の用例を除くと，他の4例（8：35，10：29，13：10，14：9）が第1回受難予告以降に集中しており，大貫隆はここにマルコの「十字架の神学」が看取されると指摘している[31]。

今後の議論では，「ポストコロニアル批評」を用いて，マルコが名詞的用法（キリスト教的用法）のみで，しかも「福音」の絶対用法によって意図していたことがいったいどのようなものであるのかを明らかにしていきたい。

（続く）

27) 大石「マルコにおける『福音』（εὐαγγέλιον）の起源とその用法」7–22 頁参照。

28) 佐藤研『悲劇と福音 ── 原始キリスト教における悲劇的なもの』（人と思想 160）清水書院，2001 年，149 頁。

29) この用法上の決定的な差異はパウロとマルコとの間の緊張関係を表していると思われる。そして，このような推論は佐藤が「パウロ的『キリストの福音』の『源』をマルコが新しく呈示するという宣言に読める」と指摘する内容と通底するものと思われる。もっとも，私見では，パウロとマルコの間には，連続性が存在するということ以上に，断絶とでも言うべき事態がより強く隠されているように思われる。本論文では，このようなパウロとマルコの間の「連続」と「断絶」という二項対立図式を脱構築することをも試みたいと考えている。

30) Strecker, *EWNT* II, 184＝『釈義事典』Ⅱ，109 頁。

31) 大貫『マルコによる福音書Ⅰ』40 頁参照。なお，パウロとマルコとの連続性，ことにパウロとマルコとの「十字架の神学」の連続に関しては，青野太潮『「十字架の神学」の展開』新教出版社，2006 年，30–54 頁（初出は『聖書学論集』［聖書学研究所紀要］27 号，リトン社，1997 年，1–25 頁），佐藤『悲劇と福音』148–149 頁を参照。